



中村俊定文庫
文庫 18
509
2

去来抄 中

同門評



後も然り柳のさし乾きおひし 芭蕉



浪化集よさる柳とあせり乞ハ予ハ誤傳するなりかき多そ
史邦々小文庫の柳のさしと改おす支考曰さる柳なりいそ
改傳るや去来曰さる柳とさいうん支考曰柳のさしひいそ
も然り隠る如くと比論せるも然り去来曰さる柳のさし
さりりさるなりさるる柳といふを極るさえ傳る故
かき多そ予ハ誤をたす支考曰吾子の説ハサリるなり

只障る柶と云ふ一丈竹曰朝の清きハ志した趣向を
支考、いふ如く、む去来曰流名の委さうと云ふ終る
口惜一此論も一ても難くもいふ人、虫もさう終るは
いうさう、乃、あつた格信も又、各別なりと論は許六曰
先師の短尺よさばる柶もあり、さう柶のさう、ハ首
切きなり、去来曰、その切のさう、ハ、予、固、さう異、今論に
おもしろ、先師の文、柶のさう、ハ、ほ、あり許六曰先師
あつたり、さう、終、さう多、一、真跡も、證、さう、さう、さう、なり
三子皆、障る柶の説なり、後賢、杉判、一、たま、ハ、
去来曰、いふ、さう、故、さう、あり、人、存、さう、ハ、汝、さう、一、さう、さう、ハ、

人、少、信、さう、さう、ハ、江、府、より、半、端、終、さう、後、大、切、の、柶、一、本、去、来、に
い、さう、さう、さう、さう、支、考、も、結、たま、さう、さう、と、續、猿、と、集、り、も
除、ん、さう、浪、化、集、撰、の、半、は、先、師、迂、化、あり、ハ、此、句、は
む、さう、一、く、終、ん、事、を、恨、て、さう、入、集、り、さう、お、め、さう、せ、け、る

雪、新、日、小、兔、乃、皮、の、幣、つ、く、ま、芭蕉

魯、町、曰、此、句、意、い、さう、去、来、曰、あ、ま、さう、さう、と、遊、び、て、と
あ、さう、さう、さう、さう、乃、業、と、思、り、さう、ハ、強、て、理、會、す、ハ、ハ、
機、弁、を、踏、破、一、て、さう、ハ、先、師、は、句、を、語、終、つ、た、予
甚、密、初、寸、先、師、曰、是、を、悦、ん、者、越、人、と、汝、の、さう、か
ら、む、と、思、ひ、一、に、さう、ハ、一、て、さう、り、と、て、終、さう、の、機、嫌

なり—世人或云雪ハ越後免の像ニ似たり或云免の
皮の髣髴するハ雪中のききなりなりなりといろく理屈を
つけてるるこそ後い—新のとき解さハ是を目に
懐けり髣髴とやら—りの形なり—いと深る—

山路来て何やゆう—草叶 芭蕉

湖春日草ハ山よもの芭蕉俳諧ニ巧なりといふも歌學
なるの過なり去来曰山路をすまはと詠ふる證歌多し
湖春を地下の歌道者なりいふ新ハ雅—らねんとい
たか川うね—

笠提—墓をめぐるや初付る 北枝

先師乃墓ニ詣てお句也許六曰是ハ服より以句ニ自任
疑有てやといへん去来曰やハ治定嘆息のや—常に
人を訪ふも笠を提て門戸をくは是ハ思ひの外ニ
墓残れりといふ句といへん一語も也凡後句ハ一句残もて
去—笠提て門よ這入るやといへ疑なく外人のするなり—

春乃群をた—一のや雛子の夢 野明

と—ハ春風や廣世にやてぬ雛子お声なり去来曰
とてなるとぬをあ—り合てやう—廣き世をた—一のやと
いへんやま—ん文叶曰廣の字様いや—春の群と
あ—むう去来公暇也

馬の耳すかめてきし梨子の花 支考

去来曰馬の耳すかめてきし梨子の花 支考
とらせしれしりゆなり支考曰何のうきまきりるん
吾子の如くかいらより一とらにいひくさむしを難ま
りなれと論す曲翠曰二子互よえざるまど易し
けさるを難しと昔論をもんをなりきんとも愚作
をいそし一とらみひ下さんいかにるし一去来曰翠亦
えしれざる故なり凡ゆるりも我うたざるまをやい
いはんえざるまをと學り次すにすみおんおのれ終に
けさるおふならしと代の擲るるまをやすすハ功と

なすす終にあそし

白水のなうりもきよなる水 木導

昔角曰おはいまうつある水廻なり去来曰角いれを又も
とわもつるめや是ふきカもなるし一ききいをれ愚作也
しおをよ月毛の釣のお明うか 許六

去来曰予此趣向ありまじき有明の花よ衆込とらひて
月毛駒芦毛馬とき廻つる水との文字を入れ口に
たよりし駿馬を推しし紅梅錯月毛川系毛おと
おもひめらしそそ尾せりしうし後許六う句をんて
不尤と嘆すうに畠山た米門佐といへ大名の名と成

山畠佐左衛門といふ一字をうへに彦屋の名なり先師曰
句とれをすんハ古頭ニ千轉せりありしもけ筆之

起さぬにまきつとちり一應の足 杜若

乾鞋と唱くりや油はく 雪也

くしひすの啼てんをなうはる 能きまは

去来日伊賀の連流もあなる風あり是則先師の一解也
迂化の後すくま一初のことくの類なりとも愚なる
みそ及く支考日伊賀能句ハせるとまきまはれ
いやかー伊賀の連流を上手なり

雪の古よ系て花乃 ちあ 羊残

去来日ふくはやといふ風情わく乗たりといひてき
句みなるまうてやの文字千金なり羊残ハ交まはれ
考也大村曰てやといふあがり上手のこまはーとえり

くしひす能方をさうまに初音ハ 其角

雪の山石よすりく初音ハ 素行

去来日角く句を暮春の乱雪也初音の力を逆みる曲句
初の字ハゆき一行く句ハ雪雪の姿あはれ岩まきうはを
まはし怖れて花あうりすすハ或ハ傳捨ハ時又まきり
うしはひそまをさうまはり凡も初を記し初まはる
中情を知つた也まきり時を珍物奇言も毫もくはる

ま本情をまわす者あり角う切者す時をりて過る
る多し初学の人情ますんいあるへん

桐の本然風をかまらぬ落葉多し 凡北

其角曰是先師の種の本然等類なり北曰志うん
詞つきの似るれをほくそろ大あかひを去来日
多れときいひく同業の句なり同業を以て他せハ
予う風の地めも落さぬ付るふといふ果と有りて
滝川の底つかりぬく養小と言出ていさう手柄
なりさしと兄より生れ捨さるんハ又吾ふなり

駒突に出迎ふ野をのささり 野明

去来曰約笑ふ人の出迎ふは世をの落まや又い直ま芒の
風情もや野明曰落のよなり去来曰くめよりさハ字
情しと吾子然俳諧の類と遠せんことを思はさり一故
たねとらま入情のよ支考曰句は秀拙いともくも
野明此場を志し向くつと不審也と感吟守予ハ人ハ
教るより年ありきて通せん一とせ先師女日よりは縁縁
ま情せしれより稜群上をせり常子俳友なく修り
むなり登れとも先師をくめ大州支考なと形中
舎吟しそ外のよる切を志しね故村の月くかた
句もか来り誠も篇をまむし一平生此意の

弱きを強くす

あ——山稜のつ——つ栗の穂 小五郎

花あて二日君はぬや原うき

正秀日嵐山を少年の句みしそまも風情あり落むハ
無功の入しるをんくして少年の句といひく——去来曰
二日とれぬといつるあり代家の恨ふまよ——
蕉門の大よ嫌よまなり

あ時のんあさよけ——おむ 越人

其角許六ともに云は句いひおほせさる故に僧より別る
とてといつるあまあり去来曰罌粟一体の句として

いのおほせり備ふとま——てねんまあり

電のうきませたり園夜うき 去来

夫軒支考ともよ曰下の又文字過り田つ——やとと
有——去来曰物を並——んたる言扱なりあ士曰最
句みしそ拵——と論すき後夫軒に語て曰退て思ふに
あ士を電の句とんく向あん只電の後新園扱の句也
故にけしち中得る夫軒曰さうりいんまさりたいてん

ほととすに帆裏まなまや夕まくれ 先放

と——めい下と明石浮といつて渡る集まあ——あかせり
可南曰いなる故にや去来曰時を帆裏まなまやとらふ

みて景情たれはけし一は明石海をまよひしはららお
祢たりもらん可南日同集は弁七う子親も明石とい
かり侍るや去来日弁七う業白ハ趣向を二つ三つとりかき
他するもおろし又下意を物せて他するこそ格あなり

とくはるもあうらんお美 菊 玄梅

許六日是を説経もいと感せん考すそなうりこそお勢也
又日人あり路よそ人あひてよつやり一トつやり一
とるを言ふとてよそ人あり去来日よつやり一
とつまよとを疑ひて下を決しし急語路不通なり
又疑ひて決まるとりあてるともあはれはぬ美辨ハよん

疑いありて下をとるもくはるもかへん又らんをら一
よかよこ許六日あふちふちひるをいとん想体てあえ
あ一あ也

鞍壺は小坊ののるや大根引 芭蕉

風國日此句いっなるもよら面ふま去来日吾子いよ解一
くくくん只國一てあ一ば一たとんを花と圖とるに
奇山出谷靈社古寺禁闕あゆハもあゆらんよま
うけ急子言来多一新のそくの熱ハ墨のあ一あ
あそあはれ杯一くくはるとりをさは又圖とる一
てかこちこおす一くぬまおあはれ是ハおもらより

支考曰いふあしと新あま節よりい入るや正秀乃曰た
先師のすけりされと恨るのこ曲翠曰句の苦思といふ
尚時他せん人とそくはといふ其角曰去の雪の門也
許六曰を佳句也いふ十分あり露川曰み文字妙之
去来曰人々の評亦たのくま位より出つ此句を
先師近化乃去の句なりも此同門の人とも難くと
たもいふこの自代とも此場ともいふ

数年のふ髪や神の光るも 去来

大宰府奉納の句なり 許六曰發句ふ切字二つ用ゝるは
法ありは句切字二つの病あり去来曰予嘗て切字二つあるは

ころなりやんもこれを切字と用は

ふもや戸板たは山乃中 助童

去来曰は句切字の上業ふく句体風姿あり語路滞くは
情秘よりなく事あふく 最當時流り乃た
中也世上の句おほくは免する故は角こそあれは句中
みわたりあひ或は目おをいふとすん切の并みとあま
一燕暖簾の下くはるはこなり此兒は下地ありそ
よな師は字ついうえりの他者より至るむ才一いふん
中は理屈な記故なりも一魚功のおまふおふんてハ
又いうえりの字理つひもなりあん怖る

さびしきや尻くく見ゆる唐の歌 木尊

許六曰此句ハ入麻のあとにわくる萩の上風といふ意に
去来曰吹送るの歌を新麻山よ帰るまき色といふ
こころ唐一体のさびしき歌といふ意各別なり多
なる由

唐 春よりけろふ新や又まつる 酒堂

酒堂曰路通いづるハ唐春を粟も稗もさる一漢句と
なりしと也去来曰路通いすハ句は花実をさる
さる故也ハ句を折乃ち粟も火氣のもれくる妙く粟を
賦しる也一句の意にありし粟もハ唐春も粟稗も

き場よ叶する物を用ふし一はハ一句の花之実ハ粟系をて動
しし初けそ外の句也花はいつも者一を内雅なると撰用の

霊系くまはぬさき新父恋一 耳泉

去来曰吾子の出生らあみ父を恋し終ふや耳泉いづく
きく多送葬し傳る去来曰然れそらけを代人の句也
吾子の對しそをうしし凡漢句を吟するに意ハ
聖賢佛神の境めも遊ふ無し一妻を禁裏仙洞の
くいさもゆし一を食素門の上もたゆふし一句に
わいすハ才よを出しし身外を吟せハあし一ま
害を求め傳る人

浄命講やあまねきまを彩は丘尼 許六

去来曰七字彩いひくさんいひく是を色さハ一句志をり
おまへん許六曰志をりハ自然の事之求て他すハ是ハ
七字を以て幾句となる也其角もさくそと評し侍る

門口や牛王めくら初しれ 化者不知

去来曰此句表根より足せしめたる其角ノ韻法師の
門れの句と多敷と評す予志誤なりそはハ少
似しものもけいけい〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜除て一句の熱体と志し
門とひれしふそそや多敷の評をなせりいと侍る

猪の鼻ぐすつうす西氏ハ 卯七

去来曰させもいひ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜此句なり正秀曰猪なり
了そ鼻をぐすつう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜後先師も
一興ありとなり去来曰退て思ふ此句いふ〜〜〜〜〜〜上方ハ
西氏めつ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜正秀もさかもふらより猪のあや
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜風情をせり予ハ西國〜〜〜〜〜〜西氏も
此句の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
さる場といたうい育〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
人の汗をたう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

慢改て人を尋よやま〜〜〜 其角

中

上

許六曰是を謎といふ句也去来曰是ハなをんもせよとい
おほせざる句也たとへて提燈て人と尋よといつるを
虫よ提燈もてたつてよ也これせんちととせんちとん
人とたつてよといふをふひより合点といつるもは也
むろー用句といふおありそれを句は切り替或ハてをを
とのあやとてましく句也け句をそ難もあはる

あさうほに第しちしち男か 風毛

魯町曰此句或人の言矣也いふ去来曰後句といふは人の
杜年曰先師の言はふまめしち男かといふ言も亦秀掛
ありや去来曰先師の句をそ角う藝うか堂といふを飽まで

巧なる句の答也句よよりなり答る亦は趣あり風毛句ハ
前後表裏一の見ると亦かし一の正と句ハ口をひくけハ
出るも然なりそろそに化て見せん何れなりと題をかされよ
魯町別露の句を乞ふ答はて襟こそんゆふ本流少又
柔の題もて「菊咲てお根のかさりや山畠と十題十句
言下は賦しちり若くしち句は疑もあらん一題も十句
せんといふ魯町別露の題をかす娘より嫁の言よん
砧か糸掛の賦をさす砧かといふをさしめ十句集
をたうす予ハ蕉門に吟才一の名ありてすしち一の況や
集りも出さる先師の句をばれと答ふの有りといふ

去来曰尚時世間の仙者翁の葦の句あるを及はくの
本槿なとの句作まよひあきまよふ句と吐かへ芭蕉流
とねほえしに族おかへし軍みきせんよこれと
記すも好也

年とや赤中の夜き星月夜 其角

元日や土つふしに教もせは 去来

許六曰尚時元日とりふ冠用らまき程あり 去来曰
元日ハ嬌ふつふまあはるやの字よ懐みまこゆ
け難なる一は句元日といはん外なりやハ嘆羨一
くも朝也許六曰其角は句を吟し喜まといふ歳旦に

あはる元日ハいひ言ひくると寂し先師曰さとうり能
他者のく日元日といはんハ拙く一とて年とやとを
重なるまよふの字よ嘆賞のやとふハなり五ッ姓
やハ疑のやとを習得る去来曰其角は句よたいてハ
先師かくのまよふ一予は句にたいてまよふのたま
ハ一他者乃甲乙ともてまよふあはる己く志す
まよ遠あり予ハ孫相新詞ともて常は才二等に
重なるまよハ先師も能見ゆる一終つて又嘆羨の
やハ名目まよふ一名目と以ていふ治定のやハ治定
みも嘆息嘆羨あり世話もまよふりや虎山翁切り

やむさう坊なるといふ皆治定嘆羨也と論寸程後賢
判一終一

風國曰彦根の羨句一句も季節と二つ入るもくせあり
新守つふや去来曰一句も季節二つ入るも疑なくも一
もとより好む事もあつた

許六曰一句も季節と二つ用るも初念のなりたる事也
季と季のながみあり去来曰一句も季と二つ用るも
ハ功者初念よるくくはさんと許六の季の通ふまに
習ありといふも予はいさゝか知る事也

盲より啞乃くいひま月見の事 去来

去来曰此句ハ十七八年前の句なりそはハ先師も羨
せられ世よも羨るあまう句也を事新くくく
羨深くといとも句位を論するに至てハ甚下品也いま
蕉門の俳友中ハ此場をなす可此後或連歌師の曰
花のもとにてけ句の評あり俳諧もかる感懐の句あはれ
あふつりくくくくは是を羨せし向くと受けハく時め
連歌師ハこれもくくはおもひゆる

喜帝牛花の喜を足せり風の秋 許六

一説け句先師の喜の慕の面足せりとも等類なりと
許六曰等類はあつたんせりとも刻のむくひもあつた

類向かりは去来曰等類といひいさ—同菓の句なる—
たといと和哥も花さうぬ常盤の山の雪いたのれゆてや
まるとおんともにみよせぬ常盤の山の小男麻いたのれ
あきてや秋とさう—むとみても多敷きさう—
俳諧もまを感あるふき事也

志くあや紅の小神を吹う— 去来

正秀乃曰いとんぶも能あ—なるたの類を去来一生の
句層也去来曰正秀の評いさ—解—ゆき予はた
志くれもて来る嵐の路とみぬの小神吹う—
け—まは紅葉吹おろす山おろ—の風と詠る

—の俳諧なる—と能—ゆるまてなり

さ川のぬるこに丁と志く向

生翹のひらくすると春よのせ

とこ—りや—乃と曲

去来曰け附句臺よのせといふおいのこの祝儀と極て
け分るりや—りひら—と—を—りな—あ
まほ—ま—次の附句まてもよう—むか—より
句体まくなるなり想て一句にひそ—あ
付—も能なり

梅の花赤いさくあふい—か 惟然

去来日惟然坊々今の風大くは乞木の穀なり昔句は
あつた先師近化の歳の夏惟然坊々詠諧と導すは
まじく口質のまよりすめて「磯」漁まきりくと
浪しとて或ハ枚の本はすくと風の吹りなりと
いふを賞し又俳諧を氣縁^{サキ}まで各分別し他す
一一とのまひ亦は後いよく風体々るらんなどの
あひくを幸と同あよひあつたまはりて身の集の
哥仙は侍る妻よふ姫子あつたりとくの雪は句なるとに
先師評し終る句勢句姿なるといふよの抱りたハ
みなく忘却せし句と見えたり

行はして見五湖烹煎の音とす 素堂

なまき人の小神もいすや土用かー 芭蕉

素堂子の句ハ深川芭蕉菴にたり終ふ句なり先師の
句を弔り妹々身まうりたるは英法の国より贈る句なり
ともにそとりの残いとなむた中よ本れははれある集と
いふは先師の事とも出らるるは素堂子の
句をあけりり詠のた中よ来るは我もて名人進人と答言
らばりりそれをもて名人といふは我ら先師の
句もかくのこし皆人の名ももつた也これのこも
世話も人事いとめまろたけといふ一氣の感通

中

七

自然の妙應かゝるゆゑもあるも然と云ふ一誠は痴人
面若菱と説くすともなり

梅白——はけふや鶴と盗あり——芭蕉

去来曰言苑集よけ句をあげて先師の事とたゞりけ句
居つゝつりといふは是亦ハ相のさうろと并ハけりて評せり
秋風ハ洛陽の富家よまゐりて市中を去山家は閑居して
詩歌をたのしむ驛人を愛すと閑さうりは速つらま
更にかれを風騷の隠逸人とおもひけりて文苑あり
いふありきむ後折けとも折れけりやけ評を
見るふりけり信諂なること誠知れり

くさのすの海向てなく浪士の浦 卯七

嘗もところめ他せり野坡曰もとあゝらんよりいやり
の文字よりむ去来も是も同一なる文軒曰のと
いひて風情ハ情れとたゞりにもといふんもまじり
——と也

中終

中

六

寬政四年子四月下旬

越後刈石船錦水閣瓢哉主

